

全体アピール

我々はヒロシマ、ナガサキの問題の深さはやはり、今なお、我々日本を撃つものであることを確念する。そして1個の人間を置いて、民族、国家の体験である被爆事実は、ヒロシマ、ナガサキの人々が等質にはらんでいることである。支配が被爆の事実を死者へのメイフクという心情的対応で、しかも平和観光都市として、めざましく復興した広島だけをとりあげて事足れりとしているかといって、我々もそうであっていいはずはない。ヒロシマ、ナガサキにおいての人々は、等質であり、我々の対応も等質でなければならない。唯、廃ジンに帰しながらも、片や都市としてめまぐるしい復興を遂げ、国家の構造の位置を固めていった広島と、国土伸長政策の全水準からすれば、そんなにでもない長崎の間には、大きな<落差>があり、その<落差>の不気味さゆえ、支配はナガサキには手を出さぬのかもしれない。なにしろ、ナガサキ、長崎の人々（被爆者）は広島とヒロシマの人々（被爆者）と等質に違いないが、確かに違う何かが存在している。安芸門徒の広島と、カクレキリシタンの長崎で、ことが同じように顕れるはずはないではないか。

広島、長崎、8・6-9 集会及び、それに続く長崎撮影行動を提起するにあたり、対象課題である広島・長崎の具体性のみならず、我々是我々自身の位相の問題、自己とその行為が世界へと至ってゆく時空の変質に関して語らぬ訳にはいかない。そうした認識をもたぬ為、莫大なエネルギーが消耗していったことを忘れてはならない。

「快樂なきところには斗いは成立しない。」これは吉本隆明の言葉だが、これをまともにうけとるから、我々は運動における快樂の拠りどころを変えねばならない。以前、運動の快樂は、運動のなかに空気のように存在していた。個の实在の求めているものは、何はともあれ、運動が成立していれば、その関係が維持されていば、個の实在は満たされていた。

しかし、こうしたことはすべて運動が成立しなくなること、関係維持しえなくなることにへつながっていた。今、我々は、こうした思維と拒絶しなくてはならない。個が自己の問題意識をとぎすまし、そのことにより運動が何ごとかをなしとげることに最大の快樂の空間を獲得しうる体系を考えるべきであろう。

8・6-9 集会への動きは、直接的には、広島、長崎のことを問題にしながら、そうした意味では、我々が現前している全課題の展開への試金石なのである。我々はこれを断固としてやり抜くつもりであり、多くの強力な意志の参加を期待してやまない。

「広島デー」 概括

「広島デー」は1968年、6月、全日本都合宿に於いて、全日の当時のメインプランの一つとして決定された。「広島デー」という名称もその時、決定された。その名称に関しては「8.6 広島デー」もあることにはあるが、その時、広島は単なるヒロシマとして取りあつかうのではなく、「ヒロシマの日々」として、もっとそこでの人間の現在の営みを取り扱うものとして、また、「我々の広島における日々」そのすべてを問題にするという理由によって成立していた。直接的には「広島デー」は2つの全日の大きな流れの中に生まれた。ひとつには、それまでの全日の写真の展開の課題であり、もうひとつには、67、10、8 羽田以後の急進的な時代状況に対応して生まれた①からであった。詳述すれば前者は1965年に個と写真という●立から写真を現代の中を個が生きることの問題として訴えることに、まがりなりにも成功し'66において個的な限りにおいて、更に具体化し、そこに於いて個的な限りにおいてはかなりの程度まで個と世界の関係を成立させていた。そして'67においては、写真のそうした個的な意図を超えて、類的な能動性を獲得せんと、他者の在り様に向けて、全面的な展開を期していった。個々人は様々にそれをやりきろうと努力した。しかしそうした努力が本質的なものであればある程、主体は自らの日本的情況の中で、深く傷つき内向的にならざるを得なくなった。もはや個々の努力の域を超えて、問題は大きかった。個々人の問題意識と努力の集積によるプラス α が必要だった。そして、一方そうした努力は10.8 羽田の衝撃波に大きく揺さぶられ、かなり現実的表層へまなざしの方向転換を迫られていた。暗中模索、試行錯誤の中で①は形成された。そして、不明不暗にかかわらず、かなりの人的エネルギーの集積をしえた。しかしながら、'67迄の行為の集積は①だけでは、我々の骨髓に迄貫くプランとは思われなかった。ともすれば、写真かゲバ棒かという二者択一に自分の足元を見失い実力行動の直裁さにひかれる。しかしそれでは今までやってきたことは何だったのか。そうした表層での衝撃波をいかにしたら、我々のメインテーマであった。日本の基層に迄はせくだしえるか、その事が多くの人にとって言外の課題として表出してきた。そうした中で生まれたのが「広島デー」である。すでに我々は、広島、もしくはヒロシマが原水禁運動等の既成左翼の力量を超えていたこと、そうした中で、ヒロシマの本当の主体であり、被害者である、被爆者は更なる課題とぶちあたっているであろうことを知っていた。それは実行にあたって更に具体的に確認された。多く言語が使われ、パリア、非人、差別される生きなければならぬ、やさしさ、殺意、働くこと資本主義等々それらすべて今の人間の生活の問題と密着してないものはなかった"生活"その言語はすべて要約した。今の人間の"生活"と"支配"の具体性を映像において再現し超越することそれが「広島デー」

に与えられた任務であった。それは、68年8月から71年8月迄の丸3年間に遡る歳月と11回にわたる撮影行動と4回のロケハン、また、2回の大きな展覧会をへて一冊の出版物となりえた。その11回にわたる撮影行動に於て、各々どうということが問題としてくみあげられ、それに対しどう判断しどういう方法が組まれていったかを多少なりとも明らかにし、広島やヒロシマを通して現人に向った一個の写真集の生成の歴史とその集合体の内容をいくばくなりとも解きたいと思う。

68.8.2~7 第一次

すでに述べたように、多くの個のうち側に、「広島デー」に参集する契機はこめられていた。事前にロケハンが行われ、アピールが作られ、「広島デー」は、プランニングから実行へと短時間に発展していった。50名近い人間がカメラをにぎりしめて広島へやってきた。そうした中ではじめての全日全体の集団撮影行動はその幕を切って落とされた。

一番はじめにやられたことは、広島市街地図を張り出してどこはどんなところで何があるかを説明することだった。はじめてということもあり、また主に式典が中心だった為、その時間的対応、「平和行進はいつどこからはじまって、云々」があつてそれは嵐のように始まって嵐のように終わった。写真集だけでなく映画も作る予定だったので、そのフィルムや録音機の手配なども大変だった。なにしろ第一次は莫大なエネルギーをもって参集した人々の個々の広島であり、それは期日が集団的検当体制（これは写真検当が主だが集撮はそれなくして成立しえない。）の年形態から、帰するところ8.6の式典であった。

あまり面倒見のいい集団撮影行動ではなかったが個々のエネルギーを焼させるには事欠かなかった。その時 新聞に僕達のことを「式典荒らしのカメラマン」として書かれており僕達は早速善後策を検討した。（確かにこの年は式典を撮るのは割と簡単なことだが、このことがあつてか否かの次の年からはえらくむづかしかった。

第一次8月から第二次9月

この間に映画の為にロケハンが行われ、市内観光バスのガイドの録音や撮影物のアングルの検当などが行われた。

第二次

第一次から第二次の展開は急も急だった。2週間位の検当（覚えているのは学館で写真セレクトの為のベタチェックをそていたら下の道を日大のデモ隊がとおり

「古田をたおせ」から「佐藤をたおせ」へとエスカレートしたシュプレヒコールをしていて「ああやってるながんばらねば！！」と思った。）そして伸しの時間しかなくそ

の検当は現地へ持ち込まれた。そこに於いてはじめて我の問題にする広島が残暑の陽ざしの中、浮かびあがった。

そこではひとりひとりのひろしまを写真で表現総括することと、その果の、今の広島に至るにはどうしたらいいかが問題にされて、そこでの対象課題としての広島に対しては<都市広島>やそれを明らかにする為の近隣地区をはらんだ<拠点思想>が提起され、また還元的視点として<写真集イメージ>が提起された。ものすごいいきおいで皆撮り始めた。とりわけ<都市広島>は<中心地>と<スラム>へ重点的に撮影しかれられていった。

ここにおいて、僕達は、僕達の最初段階における数しれない各画を摘出しえた。ここに於て集団課題の広島と、自己課題のひろしまは止揚され、個の撮影段階へまではせくだっていった。僕達は第二次に於て「広島デー」の組織的骨格を作るのに成功した。

第二次～第三次

第二次以降の写真検当は困難さをきわめた。僕達はキャビネでは大きすぎるし金もかかるということで、手札にやいためんこみたいな写真をいじりながら、いつはてるとも知らない討論に時間をついやした。レーニンの「国家革命」の読書会を催し、そこから我々の問題を摘出したり、また、68.10.21における広島での斗いをロケハンしたり、またレポート広島デーをつくったりした。第二次の<写真集のイメージ>はもうすでに更新されねばならなかった。また新たなる問題設定が不可欠だった。その中で<都市広島>から<ヒロシマ>というアンチテーゼの問題提起が行われた。それは<都市広島>をいくらつきつめても、結局は<中間支配>の枠の中水平的に拡散するだけで至るべきところを持たないことによる。そうした中で<都市広島>の個性であり、唯一の世界性である<ヒロシマ>への対峙が決定された。

第三次

僕達は広島をしゆく巡したあとで、ヒロシマを詰めれば「広島デー」を終わらしうるだろうと考えていた。だから当初、第三次は<ヒロシマ>を撮る為のシステムや内容検当に一切の努力がはらわれた。ところが第三次は新なる出発の時であった。そこで終わらしうるであると想ったヒロシマの撮影（主な資料館）は何らものたらず、前半は資料館通いみたいなものだったが後半になって、東洋工業の下請けの沢山ある海田にいったらそこにある問題の大きさから前半の<ヒロシマ>は再度、新たなる都市広島（ここでの都市は○体的体制下の産業都市広島ということになるだろう。）に出会いそこでの人々＝労働者は「広島デー」が今時的にはらまねばならない大きく重い問題を確認させた。そうした中でまたもや、数々の名作が撮られていった。話そうとしても話せないけど、写真を見れば一言もいわずともお互いに分かり撮るべきことが明

かになる、そうした雰囲気もあったし、また語りうるにたる写真もあった。

第四次

ここに至る討論では、すべてがその限界までといつめられていった。例えば原爆病院は、唯、治療だけをし、その事により返って事の本質を隠ぺいしているから犯罪的であるとか、僕達はやはり永久革命論を支持するべきであろう等々、おそろしく遠くへ至りすぎるくらいの話し合いがなされた。だけどその中で、広島・ヒロシマという既成の視点をこえた *hírou-jímā* を見出し無限のぬかるみを歩くべく想いを新たにしていた。そうした中で第四次は行われた。討論は徹夜をきわめここで終わる筈の「広島デー」は終わらなかった。

第五次

すでに僕達は広島やヒロシマを超えた。いうならば日本とその戦後 20 年間の事全体と向きあうべきことを確認していた。第五次にはいく人かの 4 年生が抜けていった後で、割と時間も余裕もとって行われた。メインテーマは、今の広島的生活ということであり、その具体性に至ることだった。そこでとられた事、それは、社会を政治と経済に分けるなら、しれは人間が労働することに向ったから当然かも知れないが、その経済的側面の問題の多い写真だった。一方、この頃から出版の為の資料書や、自己年表を作る動きが開始され、それは今まで知らなかった色々の事実を明らかにしていった。

第六次

「広島デー」を終らすにはもう一度式典を撮らねばならないことが、すでに提起されていて、ここでは式典を式典としてのみとるのではなく、また式典と人とを分離して把握する方法ではなく、いうなれば、8.6 式典を見切ることによって、僕達のやらんとする全体へ至ることと考えられた。69、8.6 は平和公園を始めて武装ヘルメット集団が埋めた時だった。しかし、いつの間にか我々は、そうした斗争行為と人々の日常の間に介在するものに気をとられていて、心の深では、無性に「平和公園をヘルメット部隊が埋める」事を期待していたくせに撮りきれなかった。

第七次

9 月には広大斗争があり、時代は明かに 69 年 11 月決戦へと突入していく感があった。そうした中で、再び広島デーは過去を揚棄したテーゼを追い求めた。

それは生活に対立する支配ではなく生活の中にある支配が撮れていない。その言葉によってまず提起された。人々の日常性の再吟味と、都市空間における被爆の今日性がとりあげられた。以前「広島デー」は「加担する」という言葉によって生活と支配の関係を表現したが、それは、ある意味ではやさしすぎることであり、攻撃力を欠く言葉だった。そうした角度から生活をとらえるのではなく、支配の根拠が人々の生

活そのものの中にあることを撮るべく第7次はあった。しかし人々の生活の日常性は、その核心をとれないまま、次にもちこされた。

第8次

ここにおいて、我々は、人々の生活に関して、ある自解を持つに至った。それは写真検当や資料作成、また自が生きていること、そのすべての吟味をとうして。

我々は「我々は生かされている」と考えた。我々の視点からは、今の生活には一切の可能性はなく、たとえ人が生きているという動かしがたい事実からそれをとらえてもやはりその生は本来を持たない空しい生であることを認知せざるをえなかった

第9次

そうして人々をささえる心理的拠点のひとつとして、安芸門徒の事が資料の「なぜ原爆は投下されたか」において明らかにされた。現世の苦悩を現世においてなんとかしないで、来世に託す。その事により現世への諦感が成立し、そこで生じる矛盾やあつれきを個の心情的範ちゅうにおいて処理してしまう。そうしたすべてが、この国家体制の中では、結局は、じゅうりんされていく生き方であること、その物質的基盤である寺町へ撮影がかけられていった。寺町の威圧性に対して

第10次

10次は、この本の根幹のひとつをなしているがそれは、70年に入って、広島が根本的に変化したことによる。そうした変化の具体性を明確にしなければならなかった。また、それを裏づけるかのようにシージャックがあり、広島の人々が、国家権力による人間射殺に拍手喝采した不気味さがあった。

確かに広島は随分かわった。それまで近代中央の攻撃に対しひっそり答えていた広島は積極的にそれを取り入れるようになっていた。段原の都市計画等、見えない、汚い近代が広島をおおいつくしていた。スラムは様々な理由に「スラム ではなくなっていた」

第11次

3度8.6が撮られた。唯この8.6は以前のものとは全然違っていった。至にエスカレーターした。首相が献花し、それを阻止しようとする人が無数にいた。

長崎からの報告

昭和 20 年 8 月 9 日、長崎原爆は、かろうじて生き残った人々の心にはかり知れない亀裂と痛憤を残したが、27 年前の時間の推移のなかで 8 月の恐怖は時間の風化作用を受けて腐蝕する。

今年もまた、南の国、長崎にめぐり来る夏、この暑熱は人間の生がじゅうと燃焼してしまうかのような錯覚をもたらし、青空にもくもくと聳立する積乱雲の上昇を見れば、人間の生がその下で圧死されるかのごとき幻影が立ちはだかる前で、8 月の平和式典＝国家司祭は国家権力の裏返しの貌として露呈する。

相も変わらぬ平和幻想の鼓舞。

27 年前の原子野は、いまや一大国際観光都市として虚飾に塗られた都市の内側に堅く閉ざされてしまい、原爆の爪跡は、明るい陽光のなかにそそり立つ平和祈念像へと様相を変えられてしまった。

被爆者の 27 年間、ぎりぎりに生きてきた生は深い空に吸い込まれてしまいそうな焦燥に、疲れた生きざまをさらけ出す。

浦上地区八千人の爆死者とその被爆家族は、心のなかでの憤りを祈りと黙想に変える。「原子爆弾が落ちたのは大きな御摂理である。神の恵みである。浦上は神に感謝せねばならぬ。」「浦上の聖者」「原子野の光」などという冠称のもとに、被爆を一身に体現したかのごとき、感情過多の文章を臆面もなく、発表しつづけた"永井隆"。彼は「聖者」として、カトリック信仰を文面に散りばめることで歪曲化し、あたかも原爆は信仰の教理を確かめるがために落とされたというような荒唐無稽な感想を書き散らし、ジャーナリズムは、厚顔無恥に彼の著作をもてはやし、以後永く、原爆投下への独占的なカトリックエゴイズムともいえる彼の解釈が、ひとつの規制力をもって、長崎の人々の意識の底へ降りかかっていくなかで、1972 年の原子野に屹立している平和祈念像を訪れる観光客と、その前で記念写真を撮る繁栄と平和に彩られた「長崎」のなかに「生」が奪われ被爆ナガサキが、片隅へと押しやられてしまっている、今我々にとって「長崎」とはノーモアナガサキといったところの感情の移入ではない。ある巨大な激烈な民族体験としてナガサキを共有するものは事実である。しかしながら、果たして日本国、日本人が唯一の被爆国であり、被爆国民であろうか。

今なお原爆症に苦しむ朝鮮半島の人々を我々はどう受けとめればいいのか。

朝鮮人被爆者、孫振斗氏は、1970年12月3日、原爆症の治療を求めて日本に入国したが、日本国政府は、彼を不法入国のかどで強制送還の処遇にしたのである。

大東亜戦争時、国家権力は400万人の朝鮮人民衆を駆りたて、日本に強制連行し、様々な苦行につかせた歴史的犯罪の事実を忘れることはできない。

その内、広島4万、長崎3万の人々が被爆し蝕し、忘却という自然の風化作用をともに受けて、宗教と虚像のなかに押し込められている総体の具体的な対峙に向い得ないかぎり、個の人間の実存的な追求の在り方のなかからは真の「長崎」の意味には到達し得ないことは疑い得ない。

我々の前に現出しているのは27年前の「ナガサキ」ではなく、1972年の原子野に屹立している平和祈念像を訪れる膨大な観光客とその前で記念写真を撮る平和と繁栄と平和に彩られた「長崎」が在るのである。

我々が対峙するのはこの長崎であり、繁栄と虚飾に塗り込められた平和像のなかに、「ナガサキ」が如何に圧迫され、片隅へと押しやられるなか「生」が奪われていることを見きわめ、見きわめた時「長崎」の虚像の崩落から実像の掌握のためにこの虚像を維持している実体への戦いを挑み始めなければならない。

彼女達のケロイドと我々のケロイドを互いにこすりつけることによって、我々の「ナガサキ」への撮影行動は、自己の内部を通過しつつ、たどりついた地点は、「ナガサキとは我々にとって何であるのか」といった初発ともいえるべき問いかけであった。

この問いかけのなかで、我々は苦しく、重く自己の身体を下降させるほか身が持ち得ず、自己の生きることの立証を求めながら、ナガサキの被爆者と被爆者意外の人間の有り様のなかで、我々は拒絶され、はねとばされ、茫然と立ちすくむのみであった。

暗黒の深淵に身を立たせている我々、不自由さに取り囲まれながらも幸福幻想のなかにいる我々が、いまこの現実世界に闘う視点を見いだすなかから、我々内部の個々の相克と、止揚の上に対象＜ナガサキ＞に両刃のやいばを突き刺すなかから、我々にとって被爆とは、戦後とは、国家犯罪とは何か、＜ナガサキ＞とは何かを問うべく闘いを激烈な行為をもって始めなければならない。

hírou-jímə -大田洋子伝

母の再三の結婚は、九歳の私の魂に真赤にぬられた一本の糸筋のような傷をひきつけた。洋子は尋常でない運命を、幼い日既に意識させられた。連れ子として暮らさねばならない湿っぽく澱んだ家、それぞれに遠慮や憎しみが巣ぐっているその中で、一筋の光のような、一葉のような、俊子のような作家になって自立する事を日々夢見た洋子であった。

妻子ある男とかけおちし別れ、生涯ただ一人の子、夢子をも棄て、女給やダンサーをやって切々と書く事続け、ヒロシマ以前数年間女流文学の一角に名を連らねた洋子だった。プロレタリア文学の作家が次から次へと戯殺されていく時、私には書けないと逃れあげくは、日支戦争を讃えんばかりの文章も書いている。しかしあの「ピカ」が洋子の道を大きく変えた。

1945年8月6日、B29 エノラ・ゲイ号は原爆を積んで、快晴の広島上空に飛来した。午前8時15分、世界初の原爆が広島上空1800フィートで炸裂した。その直後、広島市内では数10万人の人が、一瞬にして命を奪われ、重症を負った。

-せんべいを焼く職人が、あの鉄の蒸焼器で一様にせんべいを焼いたように、その人も全く同じ焼け方だった。普通の火傷のように赤味がかかったところや白いところがあるのではなく、灰色だった。焼いたというより焙ったような、焙った馬鈴者の皮をくるとむいたように、その被膚は肉からぶらさがっているのだ。-

--河原はふたたび潮がひいたけれども、そこではもうそろそろと死の幕がひらきかかっていた。うつ伏せて死んでいる人、仰向いて死んでいる人、草の上に座ったまま死んでいる人、そしてうろうろと、うつけ歩いている者は、ぼろ（襤褸）をさげ、ばさばさの髪をし、とげとげしい顔をして眼だけきらきらと光らせているのだった。--

--道のまん中にも死体がころがっていた。死体はみんな病院の方へ頭をむけ、仰向いたりうつぶせたりしていた。眼も口も腫れつぶれ、四肢もむくむだけむくんで、醜い大きいゴム人形のような死骸が散乱する中を歩いている時、姉と妹はこんな会話をか

耳と背中に傷を負った洋子は、傷を負った母、妹、妹の赤ん坊と共に、この一瞬にしておとずれた壊滅のガレキと灰色にころがる死ガイと死臭に満ちた<街>を西に辿った。眼をおおうような死骸が散乱する中を歩いている時、姉と妹はこんな会話をか

わす。「お姉さんはよくごらんになれるわね。私は立ち止まって死骸見たりできませんは」「人間の眼と作家の眼とふたつの眼で見ているの」「かけますか、こんなこと」「いつかは書かなくてはならないね。これを見た作家の責任だもの」

洋子にとってむごたらしい戦争はこの日から始まった。それを見たということが、死ぬまで洋子をとらえて離さないのである。

「屍の街」の序文に洋子はこう書いた。-「私は1945年の8月から11月にかけて生と死の紙一重のあいだにおり、いつ死のほうに引き摺っていかれるかわからぬ一瞬を生きて」「屍の街」を書いた。生き残った人々の上に、原爆症という恐愕にみちた病的現象が、現れ始め、人々は累々と死んで行った。私は「屍の街」を書く事を急いだ。人々のあとから私も死ななければならぬとすれば、書く事も急がなければならなかった。-ペン、原稿用紙はおろか、一枚の紙、一本の鉛筆もなかった私は、私の知人や寄寓先の家に障子からはがした茶色に煤けた障子紙やちり紙、二、三本の鉛筆をもらって、背後に死の影を負ったまま、書いておくことの責任を果たしてから、死にたいと思った。--」

夢中で始めた洋子であったが、その作業は困難だった。--「しかし、なんと広島原子爆弾投下による死の街こそは、小説に書きにくい素材であろう。それを書くために要な新しい描写や表現法は、容易に一人の既成作家の中に見つからない。私は地獄というものを見たこともないし、仏教のいうそれを認めない。人々は誇張の言葉を見失って、しきりに地獄といったし地獄図と言った。地獄というできあいの存在を認められないものの名で、そのもの凄さが表現できるものならば、簡単であろう。先ず新しい描写の言葉を創らなくては到底真実は描き出せなかった。」--

洋子は二重三重の苦しみの中で書く。

「書くためには思いおこさなくてはならず、それを凝視していると、私は気分が悪くなり、吐き気を催し、神経的に腹部がどくどく痛くなった--」「書かなければならない」悲壮に思いきめて書いた。昭和二十年十二月悲痛な思いで書き上げられた。

しかし本は出なかった！占領軍のプレスコード（言論弾圧体制）の時代、その中で本は出なかった！

二十二年の初めの頃、本が出てないのにもかかわらず、諜報部から日本人通訳と二世将校が広島山奥玖島村にいる洋子のもとにやって来た。そして訊問が始まる。

二世将校は言う。「あなたに原子爆弾の思い出を忘れていただきたいと思います。アメリカはもう二度と再び原爆を使う事はないのですから。広島が出来事は忘れていただきたいと思います」洋子が答える。「忘れる事はできないと思います。忘れたいと思っても忘れない気がします。市民としては忘れたいと思っていますが、忘れるという事と書くということとは別です。-作家は書きます。忘れる事をお約束はできません。

プレスコードによって首を切られた記者や、つぶされた出版社が続々とあり、反した時は沖縄に送って重労働をやらされるという時代の中で、「日本で出版できなければ、アメリカへプレゼントします。」と言い切った。

この頃洋子は、共産議員の笥中某と二年足らずの結婚をしている。相手に子捨てまで強いた共同生活だった。しかし古い女の感情と仕事への情熱という矛盾をどうしようもなかった。失望と落胆と焦煙の日々のうらに、二人でしばしば死が言われ、泥沼のような明け暮れが続いた。「人間を愛する文字を書きなさい」という言葉を残して彼は去って行った。この「人間を…」という言葉が洋子に大きく残った。

昭和二十五年の初めにこの言葉をだいて執筆が始まる

思い出すのもいやな原爆を吐き気をもよおしながら、原爆症の恐怖におわれながら、睡眠薬や抗ヒスタミン剤の常用で頭を麻痺させながら書いた。当時の一枚の写真がその事を物語る。異常に暗く、パーマネントの、のびた髪は、梳くのを忘れたように●●している。頬から耳にかけて痣のようにしみが広がる、眼は全く輝きを失って●●ぼうと開かれているのみ、一度に十才以上も年を重ねてしまった様な姿である。ここで書かれたのが「人間檻樓」である。

これを書き終えた翌年洋子は、とうとお不安神経症という症名で、東大の神経科に入院する。『半人間』の中にその時代の不安と、その中でも生きようともがく洋子の●がありありとうかがえる。

-原爆作家と呼ばれる事を嫌う作家の小田篤子（大田洋子）が大学の神経科に入院する。意識の覚醒と半覚醒のあいだに横切るさまざまな回想。…黒い赤ん坊を生んだ分裂症の同室の女。原爆被害者で、おちぶれてストリッパーの家の女中をしている女。原爆□がいつおそって来るかわからない不安。…二十五年六月に勃発した朝鮮戦争が第三次世界大戦への様相を呈してくる。連日、日本の基地から米爆撃機が朝鮮に向けて飛び立っていく。--原爆がまたおとされる。松川事件、下山事件、白鳥事件が相次ぐ。思想の弾圧が明からさまに行われる。「チャタレイ夫人の恋人」「裸者と死者」の発禁、言いたいことが言えない。どすぐろい不安……

この後、ヒロシマに迫る洋子の最後の最も執拗なたたかいの記録といえる「夕風の街と人と」が暗い時代に書き上げられた。

主人公の小田篤子（大田洋子）は1953年の夏、崩壊の街、広島を訪ねる。篤子は母の住む基町住宅に急ぐ。基町住宅は終戦直後に市の立てたバラックの戦災者住宅だが、今はどの家も朽ちて壊れかけ、雨がふれば、水道も瓦期の設備もない家には水がしみ込む、何千軒ともしれない集落に得体の知れない悪臭がただよう。その居住者たちは、「石ころと雑草と糞尿と塵埃の山を埋めた悪臭の町に住み馴れ、そこがどん底

であることに麻痺している。」篤子はまた不法住宅の群れ、相生スラムを訪ねる。

「原爆で身よりを全て失った老婆や引き揚げ者の一家や、闇酒を作っている朝鮮人●●道の真中までぼろぼろ道具を並べ立てている仕切屋の亭主、『とにかく戦争せにゃならん、原爆で身内の者七人も失うたけえねえ、むしゃくしゃして、どこでもええ戦争せにゃならん。』とわめく。

小田篤子の合った人々はまた、口をそろえて市に不満をぶちまける。立ち退きばかり要求しながら替りの住宅はいっこう立てず、しゃにむに緑地帯、公園とうたい上げ、わり込んでくる。無用道路になるのではと言われる。百米通り、統計をとるだけのABCCの悪評。

東京から来た整形外科医、神山が耳がない人、唇がない人、両足の指が全部後ろ向きの人ケロイド●●で首がまわらない人、の手術をすることになった。その場に立ち合った篤子は何度も吐き、泣きながらその光影をノートに書き止めていく。そして思う。「これを見よ、人々よ、これを見られよ」と。また楠山弁護士は米団に対して損害賠償の情熱的な話しをする。彼の話聞き終わった篤子は、希望が、たとえ持てなくても、自分の聞いただけの話を、スラムの連中に聞かせてやりたいと思うのだった。ヒロシマの重い事実と、明日の存在の危機を三重にも四重にも感じ書かねばならないと思い決めて書きつづけた洋子。その重さにつぶされそうになり、うめきともつかない。沈痛な声は、「ヒロシマ」からのがれたいと言う。

ジャーナリストの「大田の作品は売れないから…」という本末転倒戦。今、全ての洋子の作品は絶刷である！＜原爆作家＞という誠意の欠けたレッテルをはり、毎年8月がくるたびにハイエナのように群がり、手垢のついたレッテル人間として平気で置き去りしていく。昭和30年代池田反動内閣の再現、「もう戦争は終わった」というセリフが飛びかう。「太陽の季節」が文壇で力をもって来る。石川達三は洋子にこう言った。「大田さん原爆を書いたってもうだめだよ！」

今、平和都市広島が岡本太郎の前衛芸術まがいの、とりすましたモニュメント＜平和●●＞

毎年おとずれるコウ例のヒロシマ祭り、平和幻想、白いヒロシマが作られていく。天皇が行き、佐藤が行った。着々と作られている！---「原爆後に入って来た人達ばかりがはぶりがよくってね。生き残りは隅っこにおしやられている。白いかすのような広島が嫌いでね」と洋子は言う。その広島から「大田は原爆を売りものにしている。欲のために原爆を描いている。」また信じられない誹謗。「大田洋子は実際には被爆してないんじゃないか。被爆したふりをして原爆を売りものにし有名になったのではないか。」と

何も見きわめようとしない我々日本の中産階級の人間達に対し、洋子のぎりぎりに

はりつめた声がとびかかってくる。

精神も肉体もぎりぎりにつかいはたし、血へどを吐く思いで書きつけた真実は、かるい手ごたえで空中に散り年をとってからの貧乏にあえぎ、貧乏人はものを書いちゃいけなかったんだ。本を読んでもいけなかったんだ、と言わせた！その悲痛な声にどうこたえるのか。

『水爆実験があって、東京に死の灰と言われるものが降って来た。「ざまを見ろ」と思った。死の灰にまみれて、ぞくぞく死んでみるとよい。--そうすれば人間の魂が現代の不安に対して、そうあらねばならぬか、いくらか納得でき、心はゆさぶられるかもしれぬ。---』

それをうけた我々は、よし　！死んでやる、死んだろうじゃないか、と答える以外、何が残っていよう！

一人の生きる事に忠実であろうとする人間をここまでおいおとして行ったのは8.6の日にだけおとずれ　目をつぶる我々であり、また、それをとじこめている世界のありよう（平和都市の幻想）である。

我々が今どこにむかっていけばいいのか、ここに一つの我々の背を赤く怒りをもつてつきつける声がある。



全体アビール

我々はヒロシマ、ナガサキの問題の深さは力ほり、今なお、我々日本を撃つものであることを確信する。そして1個の人間を置いて、民族、国家の体験である被爆事実は、ヒロシマ、ナガサキの人々が等質にはらんでいることである。支配が被爆の事実を死者へのメソフクという心情的対応で、しかも平和観光都市として、めざましく復興した広島だけをとりあげて事足れりとしているかといったら、我々をそうであっていいはずはない。ヒロシマ、ナガサキにおいての人々は、等質であり、我々の対応も等質でなければならぬ。唯、機嫌に帰したから片や都市としてめざましく復興を遂げ、国家の構造の位置を固めて、広島と、国工伸長政策の全水準からすれば、そんなにもなにより長崎の間には、大々たる落差があり、その落差の不気味さゆえ、支配はナガサキには手を出さぬのかもしれない。なにしろ、ナガサキ、長崎の人々(被爆者)は広島とヒロシマの人々(被爆者)と等質に違いないか、確かに違う何かが存在している。安芸門前の広島と、カクレタリシタンの長崎で、ことが同じように現れるはずはないではないか。

広島、長崎、8.6-9集会及び、それに続く長崎撤去行動を提起するにあたり、対象課題である広島、長崎の具体性のみならず、我々は我々自身の位相の問題、自己とその行為が世界へと至ってゆく時空の変遷に関して語る必要はない。そうした認識をもたぬ為、莫大なエネルギーが消耗していったことを忘れてはならない。

「快樂なところには力はいらない。」これは吉本隆明の言葉だが、これをまともにうけると、我々は運動における快樂の拠りどころを変えねばならない。以前、運動の快樂は、運動のなかに空気のように存在していた。個の実在の求められているものは、何はともあれ、運動が成立していれば、その関係が維持されていれば、個の実在は消えとれていた。しかし、こうしたことはすべて運動が成立しなくあること、関係維持しなくなることへつながっていた。今、我々は、こうした思惟と拒絶しなくてはならない。個が自己の問題意識をもとに、そのことにより運動の何ごとかをなしとけることに最大の快樂の空間を獲得しうる体系を考えるべきであろう。

8.6-9集会への動向は、直接的には、広島、長崎のことを問題にしなからず、そうした意味では、我々が現前している全課題の展開への誘引石なのである。我々はこれを断固として取り扱うつもりであり、多くの強力な意志の参加を期待してやまない。

に与えられた任務であった。それは、68年8月から71年8月迄の
九ヶ月間に遡る歳刊と、11回にわたる撮影行動と4回のロケハ
ン、また、又回の大々な展覧会をへて一冊の出版物となりえた。
その11回にわたる撮影行動に於て、各々どういうことか肉題と
してくみあげられ、それに対してどう判断しどういう方法が組ま
れていったかを多少なりとも明らかにし、広島や広島を通過
して現人に回った一冊の写真集の生成の「史」とその制作体の内
容をいくばくなりとも解きたいと思う。

68.8.27 ~ 7.1 オール

すでに述べたように、多くの旧のうちの側は、「広島デー」に参
集する契機は与えられていた。畢竟たロケハンが行なわれ、ア
ピールが作られ、「広島デー」は、ポラニニニクから実行へと短
時間に発展していった。その近い人々がカメラをにぎしめ、
広島へやってきた。そうした甲ではじめての全日全休の専任撮
影行動はその幕をやって落された。

一番はじめにやられたことは、広島市街地図を張り出しこと
と。なんなところどこかあるかを説明することだった。はじめ
てということもあり、また主に式典が中心だった為、その時間
的制約、「移動行進」はいつとこうはじまって、云々、なあって
それは向のように始まって、向のように終った。写真集はけでな
く映画も作る予定だったの。そのフィルムや録音機の手配な
どが大変だった。なにしるオールは僕大なるエネルギーをこめて
参考した人々の旧々の広島であり、それは朝日や毎日の担当者
制（これは写真記者が主だが撮影はそれなくして成立しえない）
の手形態を、帰するところの式典であった。

あより回とラサのいい専任撮影行動ではなかった。たが旧々のエ
ネルギーを茂させるとは車マカカった。その時集新聞に僕達
のことか「式典見学」のカメラマンとして書かれてあり、僕達
は早速後援を授けられた。し確かにこの手は式典を撮るうは劇
と前年々ことか、このことかあつて又各々の手はうはえろ
くはつた。

7.18月10日新報 7.18月

この回に映画の為にロケハンが行われ、市内観光バスのか
うどの録音や撮影物のアニマルの授受などが行われた。

オール

オールからオニ次の展開は急む急だった。又週間位の授受く
覚えているのは季節で写真セレクトの為のベチキエフをしてい
たらその道を日大のデモ隊かとおり「石田とたあせ」なる「庄
藤をちあせ」へとエスカレートしたシユアレヒョールを（この
ころ「あつてなはんはうやだ!!」と思った。）そして押しの
時間しなくその授受は現地に落ち込められた。そこにははじ
めて我々の問題にする広島が残るの陽ざしの中、浮かびあがった。

そこでほむとひとりのひるしを写真で表現せねばならないこと
と、その果の、今の広島に至るにはどうしたらいいか問題に
まみれ、そこで解決

り返って華の手首を隠しているから犯罪的であると云、僕達はやはり是非を判断すべきであらう等々、あそろしく遠くへ至りすぎるくらいの話し合いがなされた。だけれどその中で、広島・ヒロシマという既成の視点をこえた人・you-simaを見出し無限のぬかるみを歩くべく想いを新たにした。そうして中でオマケは行なわれた。討論は徹夜をきわめここで終る筈の「広島デー」は終るなかった。

オ5次

すでに僕達は広島やヒロシマを超えた。いうなれば日本とその戦後20年間の事全体と向きあうべきことを確認していた。オ5次にはいく人々の4年生が抜け出ていった後で、劇と時周も余裕をもって行なわれた。メインテーマは、今の広島生活ということであり、その具体性に至ることだった。そこでとらえた事、それは、社会を政治と経済に分けるなら、それだけ人間が労働することに向ったから当然かも知れないが、その経済的側面の問題の多い写真だった。一斉、この頃から出版の海潮が著書や、自己年表を作る動きが沸騰され、それは今まで知らなかった色々の事実を明らかにしていた。

オ6次

「広島デー」を終らすにはもう一度式典を撮らねばならぬことだ、すでに提起されていて、ここでは式典を式典としてこのみととのひはなく、また式典と人々を分離して把握する方法ではなく、いうなれば、P.6式典を見切ることにあって、僕達のやらんとする全体へ至ることと考えられた。69、P.6は平和公園を始め武装ヘルメット集団が埋めた時だった。しかし、いつの間にか我々は、そうした戦争行為と人々の日常性の間に介在するものな気をとられていて、心の隅では、無情に「平和公園」をヘルメット部隊が埋める「事」を期待していたくせに振り切れなかった。

オ7次

9月には広島大戦争があり、時代は明日たる9年11月15日戦へと突入していく感があった。そうして中で、再び「広島デー」は過去を揚棄したテーマを追い求めた。

それは生活に對立する支配ではなく生活の中にある支配が最も撮れている。その言葉によってまず提起された。人々の日常性の再吟味と、都市空間における被爆の今日性からとりあげられた。つまり「広島デー」は「加担する」という言葉によって生活と支配の関係を表現したが、それは、ある意味ではやさしすぎることはであり、攻撃力を欠く言葉だった。そうした角度から生活をとらえるのではなく、支配の根拠が人々の生活そのものの時の中にあることを撮るべくオ7次はあった。しかし人々の生活の日常性は、その抜かをとらないです、またもろにされた。

オ8次

ここにおいて、我々は、人々の生活に向して、ある自解を持つに至った。~~それは写真撮~~

つに至った。それは今直接当や資料作成、また自分が生きていくこと、そのすべてが吟味をとうして。

我々は「我々は生かされている」と考えた。我々の視界からは、今の生活には一切の可能性はなく、たとへんが生きていくという動かしがたい事実があることをとらえても抑えしその生は手裏を握らない空しい生であることを確認せざるをえなかった。

第9次

そうして人々をささえる心理的燃焼の火とつとして、安芸内能の事が資料の「なぜ原爆は投下されたか」において明らかにされた。現世の苦悩を現世にあらわすなりと、手世に訴す。その事により現世への諦念が成立し、そこで生じる矛盾やあつれきを他の心情的範ちゅうにおいて処理してしまう。そうしたすべてが、この旧家体制の中では、結局は、じゅうりんされていく生き方であること、その物質的基盤である寺町へ撮影が及けられていった。寺町の存在性に対して

第10次

10次は、この本の転換の火とつてなしているがそれは、70年に入ると、広島が根本的に変化したことによる。そうした変化の具体性を明確にしなければならなかった。また、それを裏づけるもののようにエピソードがあり、広島の人々が、旧家体制による人間射殺に拍手なうとした不気味さがあった。

確かに広島は随分変わった。それまで近代中央の攻撃に耐えかねて答えていた広島は積極的になれようとするようになっていた。段原の都市計画等、見えない、所ない近代が広島をおおい尽くしていた。スラムは掃きな理由に「スラム」ではなくなっていた。

第11次

一度おろが撮られた。煙のふくは火のものは全然違っていった。至るエスカレートした。首相が献花し、それを阻止しようとする人が無数にいた。

長崎からの報告

昭和20年8月9日、長崎原爆は、かつて生々残った人々の心にはかり知れない痛楚と激憤を残したが、27年間の時間の推移のおかげで8月の恐怖は時間の風化作用を受けて癒える。

今年もまた、南の国、長崎にめぐり来る夏、この暑熱は人間の生かじりうと燃焼してしまふかのような錯覚をもたらす。青空にもくもくと聳立する積乱雲の上昇を見れば、人間の生かその下で圧死とれるかのごとく幻影が立ちはたかる前で、8月の平和五典=国家司祭は国家権力の裏返しのかたちとして露呈する。

相も変らぬ平和幻想の鼓舞。

27年前の原子野は、いまや一大国際観光都市として虚飾に塗られた都市の内側に堅く閉ざされてしまい、原爆の爪跡は、明るく開光のなかにそそり立つ平和祈念像へと様相を変えられてしまった。

被爆者の27年間、ざりざりに生々とした生は深い空に吸い込まれてしまい、そんな焦燥に、淹れた生々どまをとらけをす。

浦上地区八千人の爆死者とその被爆家族は、心のなかでの憤りを祈りと黙想に変える。

「原子爆弾が落ちたのは大々な御機嫌である。神の恵みである。浦上は神に感謝せねばならぬ。」「浦上の聖者」「原子野の光」などという冠称のもとに、被爆を一身に体現したかのことを、感情過多の文章を臍面もなく、発表しつづけた「永井隆」。彼は「聖者」として、カトリック信仰を文面に歌り込めることと歪曲化し、あたかも原爆は信仰の教理を確かめるかのために落とされたというような荒唐無稽な感想を書き散らし、ジャナリズムは、厚顔無恥に彼の著作をもてはやし、以後永く、原爆投下への独善的なカトリックエゴイズムともいえる彼の解釈が、かいつの規制力をもって、長崎の人々の意識の底へ降りかかっていくなかで、1972年の原子野に屹立している平和祈念像を訪れる観光客と、その前で記念写真を撮る乗客と平和に彩どられた「長崎」のなかに、「生」が奪われ被爆アガサガ、片隅へと押し込まれてしまっている、今我々にとって「長崎」とはノーモアアガサガといったところの感情の後入ではない。

ある巨大な激烈な民族体験としてアガサガを共有するのは事実である。

しかしながら、果して日本国、日本人が唯一の被爆国であり、被爆国民であろうか。

今なお、原爆症に苦しむ朝鮮半島の人々を我々はどうか受けとめればいいのか。

朝鮮人被爆者、新振斗氏は、1970年12月3日、原爆症の治療を求めて命がけて日本に入国したが、日本国政府は、彼を不法入国のかどで強制送還の処置にしたのである。大東亜戦争時、国家権力は400万の朝鮮人民衆を駆り立て、日本に強制連行し、様々な苦行に付いた歴史的犯罪の事実を忘れることはできない。

その内、広島4万、長崎3万の人々が被爆し、亡命という自然の風化作用をまともに受けて、宗教と虚像のなかに押し込められ、この後世に具体的な対峙に何の得なかり、個人の人間の実存的な追求の在り方のなから、真の「長崎」の意味には到達し得ないことは疑い得ない。

我々の前に現出しているのは27年前の「ナガサキ」ではなく、1972年の原野に屹立している平和祈念像を訪ねる歴史的観光客とその前で記念写真を撮る平和と繁栄と平和に彩られた「長崎」が在るのである。

我々が対峙するのはこの長崎であり、繁栄と虚飾に塗り込められた平和像のなかに、「ナガサキ」が如何に在るかを片隅へと押し込まれるなかで、「生」が奪われていることを見せつけ、見せつけ「長崎」の虚像の崩壊から実像の掌握のためにこの虚像を維持している主体への戦いを挑み続けなければならない。

終焉のケロイドと我々のケロイドを互いにこすりつけることによって、我々の「ナガサキ」への提議行動は、自己の内面を通過しつつ、なにより正しい地点は、「ナガサキ」とは我々にあって宿であるのか」といった初見とせりうべを問ひかけてあった。

この問ひかけのなかで、我々は苦しく、多く自己の身体を下降させるほか身が保たれず、自己の生を成すことの立証を求めながら「ナガサキ」の被爆者と被爆者以外の人間の生をどう見ようとするのだが、長崎の現実の事象が人間の有り様のなかで、我々は拒絶し、それはあとはそれ、七然と立ちすくむのみであった。

暗黒の深淵に身を立っている我々、不自由に取り囲まれながらも幸福幻想のなかにいる我々が、いまこの現実世界に問う視点を見出すなかから、我々内部の個々の粗末と、止揚の上に対象「ナガサキ」をせり上げ、我々の自己内部と、対象「ナガサキ」に両方の力による突き刺すなかから、我々にとって被爆とは、戦争とは、国家犯罪とは何か、「ナガサキ」とは何かを問うべく、自らの激烈な行為をもって答めなければならぬ。

hiroyuki-sima - 大田洋子伝

母の再三の結婚は、九歳の私の魂に真赤にぬれた一本の糸筋のような傷をひきつけた。洋子は尋常でない運命を、幼い日既に意識させられた。連れ子として暮さねばならない混濁くどい環境、それゆゑに遠慮や憎しみが巣ごっているの中で、一筋の光のような、一葉のような、後子のような作家になって自立する事を日々夢見た洋子であった。

著者ある男とかけおちし別れ、生涯ただ一人の子、洋子をも棄て、セネガやダンサーをやっで世々と著く事を続け、ヒロシマ以前数年間セネガ文学の一角に名を連ねた洋子だった。アロレタリア文学の作家が次から次へと戯殺されていく時、私には書けないと吐きあげくは、田舎戦争を讀みんばかりの文章も書いている。しかしあの「ピカ」が洋子の道を大きく変えた。

1945年8月6日、B29エノラ・ゲイ号は原爆を積んで、快晴の広島上空に飛来した。午前8時15分、世界初の原爆が広島上空1800フィートで炸裂した。その直後、広島市内では数10万人の人が、一瞬にして命を奪われ、重症を負った。

— せんべいを焼く職人が、あの鉄の蒸焼器で一樣にせんべいを焼いたように、どの人も全く同じ焼け方だった。普通の火傷のように赤味がかかったところや白いところがあるのではなく、灰色だった。焼いたというより焙ったような、焙った馬鈴薯の皮をくるとむいたように、その被膚は肉からぶらさがっているのだ。—

— 河原はふたたび潮がひいたけれども、そこではもうそろそろと死の幕がひらきかかっていた。うつ伏せて死んでいる人、仰向いて死んでいる人、草の上に座ったまま死んでいる人、そしてうろろうと、うつけ歩いている者は、ぼろ(襤褸)をさげ、ばさばさの髪をし、とげとげしい顔をして眼だけきらきらと光らせているのだった。—

— 道のまん中にも死体がころがっていた。死体はみんな病院の方へ頭をむけ、仰向いたりうつ伏せたりしていた。眼も口も腫れつぶれ、四肢もむくむくだけむくんで、醜い大きなゴム人形のようにであった。— (『屍の街』)

耳と背中に傷を負った洋子は、傷を負った母、妹、妹の赤ん坊と共に、この一瞬にしておとされた壊滅のカレキと灰色にころがる死がいと死臭に満ちた〈街〉を西に逃った。

眼をおおうような死骸が散まらする中を歩いている時、姉と妹はこんな会話をかわす。

「お姉さんはよくごらんになれるわね私は立ち止って死骸を見たりできませんは」

「人間の眼と作家の眼とふたつの眼で見ているの」 「かけますか、こんなこと」

「いつかは書かなくてはならないね。これを見た作家の責任だもの」

洋子にとってむごたらしい戦争はこの日から始まった。それを見たということが、死ぬまで洋子とらえて離せないのである。

『屍の街』の本文に洋子はこう書いた。—「私は1945年の8月から11月にかけて生と死の糸、一重のあいだにあり、いつ死のほうに引き摺っていかれるかわからぬ一瞬を生きて

「死の街」を書いた。生き残った人々の上に、原爆症という恐怖にみちた病的現象が、現われ始め、人々は果々と死んで行った。私は「死の街」を書く事を免いた。人々のあとかたも死ななければならぬとすれば、書く事も免がなければならなかった。――

ハニーで原稿用紙はあろうが、一枚の紙、一本の鉛筆もなかった私は、村の知人や寄寓先の家に降りからはがした茶色、に煤けた障子紙やちり紙と、二、三本の鉛筆をもらって、背後に死の影を背ったまま、書いておくことの責任を果してから、死にたいと思った。――

無中で書めたい洋子であったが、その作業は困難だった。――「しかし、なんと広島原子爆弾投下による死の街こそは、小説に書きにくい素材であろう。それを書くために必要な新しい描写や表現法は、容易に一人の既成作家の中に見つからない。私は地獄というものを見たこともないし、地獄のいうそれを認めない。人々は誇張の言葉を失って、しきりに地獄といったし地獄国と言った。地獄というできあいの存在を認めないものゝ名で、そのもの清さが表現できるものならば、簡単であろう。先ず新しい描写の言葉を創らなくては到底真実は描き出せなかった。――

洋子は二度三重の苦しみの中で書く。
「書くためには思いおこさなくてはならず、それを凝視していると、私は気分が悪くなり、吐き気を催し、神経的に腹部がどくどく痛くなった――」

書かなければならない」悲壮に思いきめて書いた。昭和二十年十二月悲痛な思いで書き上げられた。

しかし本は出なかった！ 占領軍のアレスコード（言論弾圧体制）の時代、途中で本は出なかった！

二十二年の初めの頃、本が出てないのにもかかわらず、諜報部から日本人通訳と二世将校が、広島県政島村にいる洋子のもとにやって来た。そして質問が来る。

二世将校は言う。「あなたに原子爆弾の思い出を忘れていただきたいと思っています。アメリカはもう二度と再び原爆を使う事はないのであります。広島の出発事は忘れていただきたいと思っています。」洋子が答える。「忘れる事はできないと思っています。忘れたいと思っても忘れない気がします。市民としては忘れたいと思っていますが、忘れるという事を書くという事は別です。――作家は書きます。忘れる事をお約束はできません。

アレスコードによって首を切られた記者や、つぶされた出版社が続々とあり、反した時は沖縄に送られて重労働にされるという時代の中で、「日本で出版できなければ、アメリカのアレサントは。」と言っていた。

この頃洋子は、共産党員の寛中菜と二年足らずの結婚をしている。相手に手放さず強引に共同生活だった。しかし古い世の感情と仕事への情熱という矛盾をどうしようもなかった。希望と落胆と焦燥の波のうちに、二人で「死にたい」が言われ、泥沼のような明け暮れが続いた。「人間を愛する文学を書きなさい」という言葉を耳にして彼は去って行った。その「人間を……」という言葉が洋子には深く残った。

昭和二十五年の初めにこの言葉を聞いて、執筆が始まる。

S. 25 年

原爆を吐ききてもおしなから、原爆症の恐怖におわけながら、睡眠薬と抗ヒスタミン剤の常用で頭を麻痺させながら書いた。当時の一枚の写真が、その事を物語る。異常に暗く、パーマネントの、のびた髪は、梳くのをおしめたように、ある。頬から耳にかけて痣のようにしみが広がる、眼は全く輝きを失って、おぼろげと開かれていますのみ、一度に十人以上も年を重ねてしまった様な姿で、そこを写したのが「人間襷褌」である。

と書き終えた翌年洋子は、とうとう不安神経症という症名で、東大の神経科に入院する。「準人間」の中にその時代の不安と、その中でも生きようともかく洋子の苦しみ、ありとかがえる。

――原爆作家と呼ばれる事と兼う作家の小田篤子(大田洋子)が大学の神経科に入院する。意識の覚醒と半覚醒のあいだに横切るさまざまな回想。――黒い赤ん坊と生んだ原爆症の同窓会。原爆被害者であらうしてストリップ家の女中としていた女。原爆が、いつある。来るかわからない不安。――二十五年六月に勃発した朝鮮戦争が、三、四年の大戦への様相を呈してくる。連日、日本の基地から米爆撃機が朝鮮に向けて飛来して行く。――原爆がまたおとさめる。松川事件、下山事件、白鳥事件が相次ぐ、思想の浮沈が明らかさまに行こなわれる。「チャタレイ夫人の恋人」「泉者と死者」の発表、言いたいことが言えない。とすぐらい不安――

その後、ヒロシマに迫る洋子の最後の最も執拗なたかひの記録といえる四風の街と人と」が、暗い時代に書き上げられた。

主人公の小田篤子(大田洋子)は、1953年の夏、崩壊の街、広島を訪ねる。篤子は母の住む基町住宅に急ぐ。基町住宅は終戦直後に市の立てたバウルの被災者住宅だが、今ほとんどの家も木朽ちて壊れかけ、雨がふれば、水道も瓦、期の設備もない。そこはたかひの町、何千軒ともしれない集落に得体の知れない悪臭がただよう。この居住者たちは、「石ころと雑草と糞尿と塵埃の山を埋めた悪臭の町に住み馬鹿なことをして麻痺している」。篤子はまた不法住宅の若者、相生スウイッチとあたる。「原爆で身よりを全て失った者、引き揚げる一家や、闇酒を造っている朝鮮人、いっせいの墓やまてばる道具を並べ立てている什切屋の亭主、とにかく戦争せにやたらん、原爆で市内の者七人も失うたけえねえ、あ、しくしゃして、どこでもええ戦争せにやたらん。」とふく。篤子の会った人々はまた、口をそろえて市に不満をぶちまける。立ち退きばかり要求する。あちこちの住宅はいこう立てず、しゃにむに緑地帯、公園にうたいや上げ、めり込んでくる。道路脇になるのではと云われる、百米通、統計をとるだけのABCCの悪平。

東京から来た整形外科医、神山が耳入らない人、唇がない人、両足の指が全部後向きの人、口で首がまわらない人、の手術手帳をすることになった。その場に立ち合った篤子は、おぼろげに、おぼろげに、その光景をノートに書き止めていく。そして思う、「これで見よ、人々よ、これを見よ。」と。また神山弁護士は、米国に対して損害賠償の情熱的な訴えを

する。彼の苦しみ聞き終った洋子は、希望が、たとえ弱くなくても、自分の胸に、吐けの吐
き、スラムの真中に閉かせてやりたいと願った。

~~洋子は、明日の存在の危機を三重にも四重にも感じ書きねばなら
ないと思ひ、涙で書きつづけた洋子。その時につぶれそうになり、うめきと~~

もつた痛みの声は、「ヒロシマ」からののがれたいと言う。

ジャーナリストの大田の作品は売れっ子から……という本末転倒現象。今、全ての洋子の
作品は絶版である。く原爆作家という誠意の欠けたレッテルを(1)毎年8月が
来るたびにハイエタのように群がり、手垢のついたレッテル人間として平気で置き取りに
していく。昭和30年代、大田反動内閣の出現、「もう戦争は終わった」という
セリフが痛々しく、「太陽の香気」が世間で「世に」来る。石川達三は洋子に
こう言った「大田さん原爆を題材に選ぶのはどうしてか」

会、平和都市広島が原爆直後の前線を行きかう、とりおれたモニュメント(平和の象徴)
毎年あるという例のヒロシマ祭り、平和の理想、白いヒロシマが作られていく、
東京が行き、死骸が行った、希望と作られている! —「原爆後に入ってきた人達
がかりが振りかぶってね、生き残りは隅っこに押しやられている。白いがすのようにな
が嫌いだ」と洋子は言う。その大田から、「大田は原爆を題材にしている、作者
のために原爆を題材にしている」また信じられない誹謗、大田洋子は東京
には原爆がなかったんじゃないか、被爆はふりして原爆を題材にしている、
ったのではないかと。

何も見えないようにとしない我々日本の平産階級の人達に押し、洋子のざりざり
にぶつめた声がとびかかってくる。

精神科医も洋子につかり、血をどろどろと見いで書きつづけた真実は、
かみきりたてで空中に撒り年をとってから金とにあり、金とにありと書きつづ
けられたんだ、本を綴りだしてはからんだ、と言った。その悲憤の筆にどう
来るのか。

原爆爆撃機が来て、東京に死の灰と言われるものが降ってきた。「死を
見る」と思わせた。死の灰にまみれて、ぞくぞくと死んでみると思い。—
「そうすれば人間の正体が現れる不安に対して、どうあらわせばいいか、
いくらかみきりたて、心はゆさぶらぬかしらぬ。」

死にかけで我々は、おい、死んでやる、死んだらうじゃないか、と答える以外、何
も残らない!

今、この夏、8月の夜、深い人間性の声と、轟々たる、殺さねつづける
深い谷の底に響く本音とあひびく、荒れた武蔵が行くはなれ、また、
平和都市の魂を白昼の光にさらすかきこえない!

原爆、原爆直後の遺体が最先にスにのこのこの広島見物するにちが
いない!

一人の死を語る事に、死んであるうしろの人間をここまておいて行ったの
は、8月の夜にちがいないと、自らを、自らを語る我々であり、また、それと
こめている世界のありよう(平和都市のありよう)である。

我々が今どこにまわっているかわからないのか、ここに一つの世の苦を赤く語り
とめてつづける事がある。

宇真集ヒロシマ・広島・kuiron-simo 販売作成 及び広島から長崎へ 86-89 行動予定

7/3 10 20 8/1 23 4 5 6 7 8 9 10 20 7月 10月 11月 12月

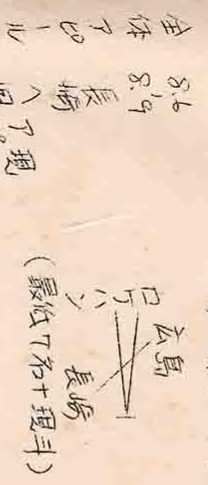
ジヤータリ バム村 策

外野サークル 書店・図書館

外野歌謡 (学書)

内野集井販売 (地と人間の歴史)

攻撃目標リストアップ [外野一般写真員田村 因書館]



全体アビル
8.6 長崎へ
8.9 アビル
現地報告書

販売 (広島から長崎へ) (資料)

キヤノン —— 資料キナー ——>

広島オ一庫
広島集
広島撮影
広島三ノボロ
長崎撮影
長崎三ノボロ
現像

長崎
潘行流

8.8-10
こちの倒の
8.9 式典を!!

地正本都集約
長崎撮影行動
全国アビル

長崎オ一次
撮影行動

リ-7 レット 40.3
現地の人ナ行動隊
86-94 300 資料キナー
長崎の資料キナー

全体アビル

太田厚子 激烈伝
長崎島ナニ 総括

広島から 86-9 に向けて
地図 (8.6 活動地図)

今広島の問題に 対す (広島 491)
被爆二世 (8.6-9 に関連)

日桂とこで 何の集会があるか

8/4

6:00

宇真集青年研究所
新編集会 5日行動の具体化
戦列隊長

5

街分並より 浮世行進
決戦行動 内容決定 討論

8/6

折念古典

巨制 靖国には存在公団に
群々に新りに来る道標選

7

テモ 灯籠流し

7

シンボロ

写真展示 広島
ヒロシマ 11.11.11

8/8

映画 両者の裏切りを
資料 大田厚子 式典キナー

8

長崎結果

折り紙 式典 折り紙 式典
現地のあつちの人同様に

10

シンボロ

今の世界状況の中
我々は何に何を生きている

ヒロシマ・長崎 展 (学書) 予定